

# 敗者の成功 Éxito para perdedores

著者：ダヴィッド・カントーリャ、フアン・ディアス＝ファエス

David Cantolla, Juan Díaz-Faes

出版社：アスティベリ Astiberri

出版年：2012年

ページ数：280ページ

言語：スペイン語

読者対象：一般

ジャンル：コミック

レポート作成：高木菜々

## 概要

世界中で大人気の幼児向けCGIアニメ「ポコヨ」(<http://www.pocoyo.com/>)の製作者のひとり、ダヴィッド・カントーリャが主人公。2000年前後のインターネットバブルの狂乱が引き起こしたダヴィッドの成功と挫折、そして新たな成功の物語。時にはドラマティックに、時には心温まるタッチで描かれる。構成がユニークで冒頭のプロローグの後、パート1は、ビジネスが破綻した2001年10月から過去へと遡り、彼とその仲間とビジネスに何が起きたのかを辿り、再び2001年10月に戻って終わる。パート2は5年後の2006年、「ポコヨ」が英国アカデミー賞を受賞するところから始まる。所々に挿入される逸話やたとえ話が、ビジネスのからくりや心構えを分かりやすく説くツールとなっている。

## おもな登場人物

ダヴィッド：主人公。テクノランドの創業者の一人で執行役員。

ルイス：テクノランドの創業者の一人であり、会長。

マエストロ・ヤン：道理を説く師匠。

## あらすじ

1993年カルフォルニア シャネル島（8年前）

ウニ漁船上で、今後の人生について悩むダヴィッド。そんな彼にマエストロ・ヤンは、難破した船の兄弟の逸話を語り、選択をする事、またその選択に従いつき進むことの大切さを説く。

## パート

2001年10月マドリード

取引先の銀行で新たなビジネスへの融資を相談するダヴィッド。しかし担当はにべもなく融資を断る。ダヴィッドは口座の有り金を全て叩いて、ゼロから始める決意をする。

2001年9月マドリード 1か月前

複数の知り合いに電話をかけるダヴィッド。しかし誰も会ってくれない。街頭のウィンドウのTV番組ではインターネットビジネスでの失敗をこき下ろす専門家たちのコメントが流れる。訪問先で面談かなわするダヴィッドは競合である顔見知りにも辱めを受ける。

2001年7月マドリード 3か月前

自宅で引きこもりながら日がな一日、ゲームをするダヴィッド。ゲーム上では現実世界と違いロジックに従えばビジネスは成功する。全てはIT企業などテクノロジー産業の株式市場ナスダックの暴落から始まった。1990年代後半に「ドットコム」に投資が集まり、いくつもの企業が急激に株価を上昇させ、そして2000年頃、株価が急落し倒産に追い込まれた。ITビジネスに関わった者はダメ経営者として烙印を捺された。何が起こったのか...

挿入話：マエストロ・ヤンの「缶詰フィーバー」こうしてインターネットバブルは弾けた

株価上昇と急落のからくりを戦時下の缶詰の買い溜めに例える。

2001年5月マドリード 4か月前

空っぽのオフィスに行くダヴィッド。車の差し押さえの訴状の名義はかつて友人だったはずの人間。車で家に戻った所、ついに警察に車を差し押さえられる。家には色々な訴状が山積みになっている。電話をしてきた共同経営者のルイスも民事訴訟を起こされている。ダヴィッドは出資者全員に2100万ユーロずつ支払わなければいけないことを知る。

2001年2月16日 マドリード 8か月前

眠れぬ夜を過ごしたダヴィッド。ルイスとともに会社に向かい、同僚たちと親会社のテラネットワーク社からの返

事を待つ。テクノランドを倒産させるか否か、それぞれが心配な面持ちで意見を交わす。運命の11時。テクノランドは見放された。

2000年11月 サンパウロとブエノスアイレスの間のどこか 11カ月前

パンダと仲良く遊ぶダヴィッド。突然、豹変するパンダ。乱気流の中の飛行機で悪夢を見ていたのだ。テラネットワーク社の新しい経営陣はテクノランドに価値を見出さない。株式公開の為に大きな賭けに出て失敗したテクノランド。テクノランドが生き残るにはダヴィッド達が手放さなければならない。テラネットワーク社が生殺与奪の権利を持つ。パンダはテラネットワーク社を象徴するキャラクター。

挿入話：マエストロ・ヤンの共同経営者一覧 誰と旅路を共にするか

良い共同経営者は経験で分かる。でも、自分の心の声に従えば誰と組めば良いのかわかるはず。共同経営者見本一覧。色々なキャラクターを共同経営者に例え、それぞれドライブ容量と毒性の度合いでその価値を評価。

2000年4月 ニューヨーク 1年半前

ルイスは投資銀行からナスダックでの株式公開を見送るよう説得される。しかし、そうすると会社はさらに厳しい状況に追い込まれる為、会社をスリム化することを勧められる。投資銀行こそ株式公開を勧め債務を広げた張本人であるにも関わらず…。憤然と立ち去るルイス。

2000年3月 ニューヨーク 1年7カ月前

マンハッタンのビル最上階でのテクノランドのパーティ。ルイスが各国のテクノランドの代表者や関連ビジネスの代表者、社員、投資銀行の人間を前にテラネットワーク社とのM&Aによるナスダックでの株式公開について展望を話す。この時すでにインターネット関連ビジネスの衰えが始まっているが、ルイスは一過性のものだと説明。一方ダヴィッドはそのパーティで自分のまったく知らない関連会社の人間に出会いルイスに懸念を話す。ルイスは投資銀行が高く評価していると太鼓判を押す。

挿入話：2000年の儲かる「ドットコム」会社のレシピ

中年の共同経営者、社員は出来るだけ少なくする 社暦は出来るだけ短い方が良い 債務は出来るだけ多く もちろん、何かインターネット関連の企業であること 何百万ものユーザーにアクセスできるビジネス 畑違いの取締役を2、3人取り入れる 信じられないような結果をもたらすビジネスプランを立てることが信用につながる イケてる名前を付ける 後はやってみよう！

挿入話：マエストロ・ヤンの教え 「戦士と朝廷」 ~ 成功すると初心を忘れがち ~

会社は成長すると新たな戦略や取り組みが必要とされるが、最初に誠意を傾けてくれた仲間をどう扱うかは今後のアントレプレナー（起業家）としての方向性を決定づける。

（たとえ話）昔々、ある国のふたりの戦士は化け物を成敗しその土地を征服することを夢見る。金持ちに協力を請うが相手にされず、志を共にする他の戦士達と化け物と戦ううちに、どんどん協力者が現れ、ついには化け物に打ち勝ち土地を手に入れ、国を作る。ふたりの戦士のうち、ひとり王に、もうひとは将軍になる。前者は戦を知らないが政に長けている者たちと国を治める。戦で血の犠牲を強いられた戦士達の言葉を無視し、巨額の金を政治に注ぎ込む。王は将軍に国を治めるには必要なことだと説く。その夜、将軍と戦士達は他の夢を探して国を捨てる。そして王国は再び化け物に乗っ取られる。

2000年3月 北京 1年8カ月前

ダヴィッドは中国の大手IT企業の社長にテクノランドのプレゼンをしようと北京に来た。緊張するダヴィッドはマエストロ・ヤンに自信がないと伝える。マエストロ・ヤンは失敗したら微笑めと言う。「本当の微笑みは無理につくるものではなく自然と湧き出る」と。ダヴィッドはテクノランドの世界に広がる関連会社、福利厚生などプレゼンをやり遂げる。しかし中国人社長は聞く。「何の会社か？」

答えられないダヴィッド。微笑みは素敵だけどインテキ集団とはビジネスを組まないと中国人社長は考える。

1999年12月 ニューヨーク 1年10カ月前

テラネットワーク社との会合。テラネットワーク社の出資によるビジネス開拓を評価し、ナスダックの株公開を準備する投資銀行。銀行側は言葉巧みに抜け目なく株式公開の道程を説明する。

1999年7月29日 マドリード2年3カ月前

テラネットワーク社と契約を取り交わしたダヴィッド。同社はテクノランドのインターネットビジネス、顧客、チームを評価し、代わりに資金力と世界的な知名度を約束する。その契約締結の場で渡された小切手を手にダヴィッドは嬉々として帰宅。妻とともに喜ぶ。

1999年3月 マドリード 3年前

TVスタジオでのルイスとダヴィッドとCFO（最高財務責任者）のリカルド。成功への道のり、今後の展望を話す

。テクノランドやIT企業への投資を賛美する専門家。最初はテラネットワークからの買収話に反対だったダヴィッドも、同社の資金力や知名度でさらにテクノランドが成長出来ることを最終的に納得したとコメントする。

1994年マドリード 7年前

明け方の工科大学。教室で寝ているダヴィッドをルイスが起こしに来る。ついにインターネットが開通する。雨の中、バイクに乗るふたり。インターネットに懐疑的なダヴィッドにルイスはその可能性と将来性を説き、ビジネスを始めようと誘う。

挿入話：マエストロ・ヤン

走る。本気で走る。どうやって自分のやっていることに意味を見出すか完璧な装備で走るマエストロ・ヤン。買い物袋を提げたいかにも走りにくそうな格好で走ってくるおばさんに遭遇。健康の為、走る為に走るマエストロ・ヤンと違い、バスに遅れまいと必死に走るおばさん。確固たる目的とやる気がおばさんにはある。その熱意が伝染することもある。他人の夢と一緒に叶える事も成功と言えるのではないか。

1976年 サンタンデール 25年前

小遣稼ぎに友人と港で釣りをする幼いダヴィッド。そこへいじめっ子たちが現れ魚を取り上げようとする。抵抗するダヴィッドに石が投げつけられ、怪我をする。病院で手当てを受けるダヴィッドは母親に禁じられている事を行ったから罰が当たったと医者に言う。医者は「神様は罰を当てたりしない」と諭す。トラブルに陥る人は往々にして状況も悪くなる。でも良いことをしていても悪いことが起きる事もある。そんな時だからこそ、失敗から学びやり直すことも出来る。

2001年9月マドリード 10分前

高級レストランから出てくるダヴィッドと妻。最後の5ユーロを手にダヴィッドは語る。この数カ月の間、全てを失うことを恐れてきたけれど、失ってみるとその恐れは消えてしまった。妻とゼロからやり直す事を決意する。

パート 5年後

2006年 BAFTA (英国アカデミー賞) 授賞式 5年後

最優秀幼年部門アニメは「ポコヨ」に決定。喜ぶダヴィッドと仲間たち。

難破した船の兄弟のひとりがダヴィッドであったなら、彼は泳いで助けを求める方だろう。どこに向かうか分からないまま、ただひたすら泳いで、時には休み、また泳ぐ。そのうち必死で泳ぐ仲間が出てきて、気付くと溺れる所にはいない。テクノランドの破滅から5年。ダヴィッドの手がけた番組は100カ国以上で放映され、その関連商品も売れた。気付いたら成功していた。振り返れば、あの難破はこの島にたどりつく機会を与えてくれたのだ。

起業家達

新しい事を企てると自然と周囲に伝染し、仲間が集まってくる。成功からも失敗からも学んできた仲間たち。テクノランドの倒産は惑星の爆発のようなもので、その星屑から他の惑星が生まれた。その磁力でまたみんなを寄せ付けて、いつしか同じ銀河系の惑星となった。

エピソード

映画の「プライベート・ライアン」では登場人物のウェイドが撃たれ、仲間が必死で助けようとする。医者である彼は自分の命が致命傷であることが分かる。人生残り30秒で何を望むか、ダヴィッドも考え、試してみる。思い出すのは家族や友達の事ばかり。不思議な事に過去の失敗、創立した会社、得たお金、失ったお金、嫌な事、自分をひどい目に遭わせた人、受賞した事、これからのプロジェクト、そんなものたちはこの30秒に入らなかった。だって、全然重要なことじゃなかったから。

所感

ビジネスの挫折から学ぶ人生哲学本。インターネット黎明期のスペインでインターネットに注目し、スタートさせたビジネスでいつの間にかITバブルに踊らされてしまった主人公とその仲間。あっという間に足元をすくわれ、膨大な債務を抱え苦悩する。その道筋を振りかえりながら、ITバブルの仕組みを分かりやすい例でひも解く。そして中国の賢人の風体のマエストロ・ヤンという人生のチューターを狂言回しに据え、逸話をういてビジネスにおける教訓・哲学を諭す。最終章ではビジネスでの成功・失敗、裏切り...と言った経験より、最終的に大切なのは家族や友人であると主人公は悟る。

失敗から学ぶ自己啓発本というジャンルだが、分かりやすく、親しみやすい言葉や例で描かれている。場面ごとにコマ割り、構成、ナレーション方法が異なり、また控えめな性格の主人公の気持ちを丁寧に描き出している所に、教訓本やビジネス書と括れない情緒のある作品となった。起業を試みる学生や社会人だけでなく、ド根性物語が苦手な読者や、教訓めいたハウツーものが苦手な読者にも十分受け入れられるコミック作品である。エッセイ漫画がひとつのジャンルとして確立している日本では比較的受け入れられやすい作風と言える。

ただし、サブタイトルに「マエストロ・ヤンと起業家練達術」とあるように、マエストロ・ヤン（中川いさみのクマのブー太郎のような絵柄）と言う東洋的なイメージが日本人に受け入れられるか、またリーマンショックや大地震に見舞われた今日の日本社会にとって、10年以上前のインターネットバブルが果たして興味を引くテーマになり得るか、と言った疑問が残る。さらに、欧米を中心とする幼児や親の間では有名な「ポコヨ」だが、日本ではWOWOWで放映されている程度で認知度は低いかもしれない。その製作者の成功・失敗談に日本人が興味を持つかどうか？ ただし、作品そのものの完成度は高い。

さほどスペイン語特有の表現がないので翻訳にほとんど難はない。戯画化されたシンプルな絵柄の登場人物たち（ギャグ漫画というより絵本の挿絵のようなタッチ）、フリーハンズのコマや背景は、一見すると単純だがセリフなしの場面でも構成などで心象風景を巧みに表現しており、熟練した作画力は評価できる。またそれぞれの逸話は教訓的な大人の絵本として楽しめる。

試訳（62 - 64Pから抜粋） 1コマごとに改行  
マエストロ・ヤンの起業家練達術（マエストロ・ヤンのモノローグ）「缶詰フィーバー」

「1本の美しい花を見つけても、それを無理やりに2本に増やすことはできない。」  
一時高価だった物が、次の瞬間には紙屑同然になるという事を説明するのはたやすくはない。でも、分かりやすく説明してみよう。

戦時下では物資不足の為、物の価格が不安定になり、通貨さえその価値を日々失っていき、食糧と物の物物交換が主流となった。

そこで時間の経過によっても価値を失わない物が価値を持つようになった。

何年もの間、保存出来るはずの缶詰の保存食は需要と共にその価値を増していった。

缶詰は、いわば「未来」を確保する一番簡単な方法となった。

そして人々は缶詰を貯めるようになった。

物の価値は缶詰の数で量られるようになり、将来的に価値が上がるとされる缶詰と引き換えに物が売買されるようになった。

問題は保存食の価値が上がり続けると信じ、缶詰を買い続ける輩が出てきたことだ。

持てる者はさらに富み、持たざる者はさらに貧しくなった。

しまいには缶詰を売って新たに缶詰を得る者すらいた。

でもある日、そんな追い風の状況で、ニューリッチが缶詰をひとつ開けてみると、はたして保存食は腐っていた。

そこでニューリッチはこう考えた。「缶詰を開かず価値を損なわず、どうやって中身が大丈夫かどうか分かるのか...。ならば開けない方が良い」

そんな噂が一気に広まり、みんな缶詰をどんな安値でも売り始めた。

最後に売った人間は全てを失った。

そうやって缶詰の価値は一気になくなった。

インターネットバブルでは急速にその価値を上げた会社が数多くあった。中には「腐った缶詰」と言える会社もあったが、本当に健全なビジネスを行っている会社もあった。問題は、最初にそれらの会社に高い価値をつけた立場の者に、「良い缶詰」と「悪い缶詰」を見分ける能力がなかったことだ。彼らは最終的には全てを「悪い缶詰」として断定的に評価してしまったのである。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/bai-zhe-nocheng-gong-exito-para-perdedores>